

日本近代文学における「遊民」像の諸相 —漱石『それから』及び乱歩『屋根裏の散歩者』を例として— 台湾大学 院生 蔡志勇

1. はじめに

日本近代文学においては、作品に「遊民」を登場人物として盛り込んだ作家に触れる際、夏目漱石の作品を連想する人が多い¹。社会が高等遊民問題によって喧しくなる直前に、『それから』(1910)の代助は高等遊民として造形されたことは、意義深い存在である。とは言え、「遊民」をモチーフにした作家は漱石一人だけではなく、大正時代末期に至っても、江戸川乱歩の『屋根裏の散歩者』(1925)にも見られる。「遊民」は明治末期から大正にかけていかに変化してきたのかという問題は興味深い。平野嘉彦は

夏目漱石の『それから』(1909)の主人公の代助が、(前略)「上等人種」であると自己を規定していたことからすれば、『D坂の殺人事件』の「私」は、おなじ「高等遊民」の系譜につらなっている、明治の御世とはちがって、はや昭和ともなれば、すでに相当に無思想で、遊惰の風に流されてしまっているのもいたしかたないところではある。

と論じている一方、また、次のようなことも語っている。

すくなくともそのように定義にすることによって、つぎに上梓されることになる『屋根裏の散歩者』は、まぎれもない「遊民」の営みを主題にした作品として、いささかの意味をもつになるだろう²(下線筆者、以下同)

平野氏は漱石と乱歩との作中人物を系譜にして論じている。たしかに氏の言った通り、『それから』の代助と『D坂の殺人事件』や『屋根裏の散歩者』の「遊民」は、時代の推移に従って、その思想や生き方が変わってくる。しかし、平野氏は郷田三郎のような「遊民」はひとつの時代現象としてあげられたところにとどまっている。その上、両作品を中心に、「遊民」像の諸相を全面的に論じた先行研究も見当たらない。たとえば、最後に「遊民」の市民権を放棄したという先行研究の代助像とは異なり、郷田とは、「遊民」の身分から「犯罪嗜好者」になったという相違が見られる。「遊民」を通時的に理解すれば、日本文学作品における「遊民」像の流れを把握できるのではないだろうか。

よって、小論では『それから』及び『屋根裏の散歩者』における作中人物を取り上げ、「遊民」になる背景やその造形などを考察しながら、日本近代文学の「遊民」の諸相をよりの確に把握することを主旨とする。

2. 時代のメディアや先行研究に見る「遊民」

前述のように、文学作品において「遊民」という語はもともと『それから』の代助への父親が批判として使った言葉であるが、『それから』発表の翌年に書かれた石川啄木の「時代

1 たとえば、熊坂敦子は「高等遊民らしい要素を備えているものとしては、「猫」の迷亭、「虞美人草」の甲野さん、「三四郎」の広田先生、「それから」の代助、「彼岸過迄」の須永と松本、「こころ」の先生等を挙げることができる」(熊坂敦子「「高等遊民」の意味」『国文学 解釈と鑑賞』至文堂、1968年11月、p.66)と指摘している。

2 平野嘉彦『「屋根裏の散歩者」から『猫町』へ』—『群集と観相学／群集の観相学』の序にかえて—『ドイツ文学』、日本独文学会、2006年10月、p.2

閉塞の現状」で、遊民について以下のように指摘している。

日本には今「遊民」といふ不思議な階級が漸次其数を増しつつある。(中略) 彼等の事業は、実に、父兄の財産を食ひ減す事と無駄話をする事だけである。³

啄木は明治末期の社会問題から派生した「高等遊民問題」に注目して、「遊民」という階級が増えていることを懸念していたように思える。

当時のメディア⁴によれば、「高等遊民」とは「高等の教育を受けて而も一定の職業なき」「遊民」のことをさしているが、財産の有無によって、就職しない者と、就職に困る者に二分されたという事実がわかる。一般には「高等遊民」は当時の社会に悪い印象を与えていたが、社会に貢献したとするような見方⁵もある。

日本歴史研究者である町田祐一が紹介した⁶ように、こうした高等遊民は第一次大戦による好景気で、「就職難」問題が一時改善されたが、1920 年頃に始まった大戦後の恐慌の発生により、再び悪化したのである。

松山巖は「高等遊民は、すでに夏目漱石が『それから』の主人公をもって描いてみせたが、東京が巨大化するにつれ増大し、大正中頃から社会問題化している」⁷と指摘している。

上掲のように、「高等遊民」は、漱石が書いた『それから』の前に問題化して、大正時代に入っても社会問題化されていたと考えられる。以下は両作品の作中人物に関する先行研究を取り上げて考察してみる。

³ 石川啄木「時代閉塞の現状」『石川啄木全集 第四巻』筑摩書房（明治 43 年以降執筆、当時未発表。大正 2 年『啄木遺稿』に発表。1980 年 3 月）p.268

⁴ たとえば、桑木巖翼は当時の高等遊民の問題を取り上げて、その原因を明らかにしているのであるが、結果としては高等中学を卒業した者が、大学に入学を制限されたために落第し、専門的、職業的学問を得られないために就職できなくなり、当時のメディアによれば「学制改革に伴ふ一問題」といっている。高等遊民の問題は当時の教育制度とかかわっていた。(桑木巖翼「京大七博士気焰録 高等遊民」『太陽』、1911 年 8 月、p.62) また、『早稲田文学』彙報欄にも、「高等遊民」という言葉の意味は「高等の教育を受けて而も一定の職業なき人々」のこととするのが、「高等遊民」には二様の別があるとして、第一は「相当の財産を有し、従て生活の為に職業に就くの要なき人」であり、第二は「絶えず生活の必要に迫られ、何等かの職業を獲んとするも不幸にして之れを獲るに由なく、さればとて身を下して職業に就くことを得ず、已むを得ずして遊食する人々」⁴と書いてある。(彙報欄「教学界」『早稲田文学』第 73 号、1911 年 12 月、pp.56-57)

⁵ 桑木氏は高等遊民が「学術、文芸等を娯楽的に嗜好」するうちに、「社会を紊乱する」どころか、却って「社会を益する」ようになったのだと続いて論じ、高等遊民を位置づけている。(桑木巖翼「京大七博士気焰録 高等遊民」『太陽』、1911 年 8 月、pp.62-63)

⁶ 町田祐一「第二部「高等遊民」問題の再燃」『近代日本と「高等遊民」—社会問題化する知識青年層』吉川弘文館 2010 年 12 月、pp.136-137

⁷ 松山巖「高等遊民の恐怖」『乱歩と東京』筑摩書房、1994 年 7 月、p.65

3. 作中人物に関する先行研究

瀬沼茂樹は代助を「父親からの不浄な金を糧にもらいうけ、都市の知識人として、肉体の健康美するギリシア主義、(中略)趣味に生きる美的快樂主義、エピクロス主義を思想する」8者だと論じている。瀬沼説を受け、米田利昭は「高等遊民とは、ならずともよいのに自ら進んで遊民となる、いわば自発的失業者だから、そのためには、そうなる発条として(1)経済的余裕、(2)美的享受、(3)文明批判の三条件を充たしていなくてはならないだろう」9と定義し、最も典型的なのが代助だと指摘している。

代助は実業家の父と兄から経済的援助を得て、「退屈になれば出掛けて行く」ことができ、「書生と五目並べをしたり、嫂と芝居の評をしたり」(三)するような美的享受を受ける「高等遊民」である。つまり、(2)美的享受に達するために、代助は(1)経済的余裕に依存せざるを得ないのである。

一方、管見では『屋根裏の散歩者』に関する先行研究において、遊民像を中心に論じているのは武田信明と松山巖であろう10。武田信明は「郷田(犯人役、筆者注)にせよ明智(探偵役、筆者注)にせよ、彼達は、いずれも単身者であり、定職につかぬ遊民であ」11ると指摘しており、松山巖は「『屋根裏の散歩者』は世のなかと接点をもてず、退屈でしかたないと呟いて、ブラブラとしている高等遊民の話である」12と述べている。いずれも「『遊民』の営みを主題にした作品」だという平野説と同じような見解であろう。しかし前述したように、両作品における「遊民」像はそれぞれ異なっている部分があるので、ここでは代助と郷田との二人の遊民を例にして、考察していきたい。

4.1 代助・郷田はなぜ「遊民」になったか？

代助の場合：

すでに指摘されているが、代助は、「日露戦争後の商工業膨脹」(十五)によって形成された資本主義社会に生きていて、そこから生まれた様々な矛盾に気づいている。たとえば、競争社会の犠牲者とされている平岡が吐いている「只麵麴が得られゝば好いと云ふ事」に、代助は理解しがたい。「何故働かない」という平岡の質問に対して、代助は「日本對西洋の關係が駄目だから働かないのだ」と答え、日本が西洋と競争するなら、「牛と競争をする蛙と同じ事」であると付け加えている。日露戦争後から見た社会のゆがみを鋭く見通し、その不安と矛盾を抱えている。

しかし一方、「傍観者にして」いながら「*nil admirari*の域に達し」た、「三十になつて遊民として、のらくらしてゐる」と父親に叱られ、社会への接触をあえてしない。

以上は米田利昭が定義した「高等遊民」の三条件に基づきながら、一「高等遊民」であ

8 瀬沼茂樹『『それから』—『満韓ところどころ』』『近代日本思想家 5 夏目漱石』東京大学出版会、1962 年 3 月、p.162

9 米田利昭「高等遊民」三好行雄編『夏目漱石事典』学燈社、1992 年 4 月、p.138

10 武田信明『『屋根裏の散歩者』—「遊民」のまなざし』(『国文学 解釈と教材の研究』学燈堂、1991 年 3 月)、松山巖「高等遊民の恐怖」(『乱歩と東京』筑摩書房、1994 年 7 月)

11 武田信明『『屋根裏の散歩者』—「遊民」のまなざし』『国文学 解釈と教材の研究』学燈堂、1991 年 3 月、p.56

12 同注 7、p.65

る代助の生き方の意味は、日露戦争後に生まれた、家庭的、社会的な背景にあったと考えられよう。

郷田の場合：

郷田三郎は「学校を出てから（中略）職業は、片っ端からやってみたのです。けれど、（中略）彼は職業から職業へと転々しました」が、「親許から月々いくらかの仕送りを受けることのできる彼は、職業を離れても別に生活には困らないのです」（p.249）

引用文にあるように、この二十五歳の郷田三郎はすでに、「遊民」の資格を充たしていることは言うまでもないが、彼は仕事にも遊びにも飽きており、普段の生活に退屈してならなかった。生活を面白くするために、「職業や遊戯と同じように、頻繁に宿所を換えて歩」いている。最後は東栄館という下宿屋に引っ越したことで、『屋根裏の散歩者』が始まる。以下は物語の舞台についての叙述である。

東栄館の建物は、下宿屋などにはよくある、中央に庭を囲んで、そのまわりに、桝型に、部屋が並んでいるような作り方でしたから、したがって、屋根裏もずっとその形につづいていて、行き止まりというものがありません。（中略）

下の部屋々々には、さも嚴重に壁の仕切りができていて、その出入口には締まりをするための金具まで取りつけてあるのに、一度天井裏に上がってみますと、これはまたなんという開放的な有様でしょう。誰の部屋の上を歩き廻ろうと、自由自在なのです。

このような東栄館の構造について、松山巖は次のように語っている。

この発想は二〇年代でなければ生まれなかった。なぜなら、このような構造を備えた下宿館は、明治には数は少なく、東京が人口を急増させた大正中頃以降に多く現われたものであるからである。屋根裏を歩いて他人の部屋を上から覗けるのは、各部屋が間貸しのように、襖や障子で仕切られるのではなく、しっかりとした壁に仕切られて容易に隣室から覗けないことが条件である。¹³

ここで松山氏がいくつかの点を指摘している。まずは、物語の時間が大正中葉頃に設定されており、当時の東京では人口が増えたことへの対策として、あちらこちらに下宿屋を建てたことがわかる。こうした下宿屋には、長時間に住む者より、短期間の独身が相応しい。また、「壁に仕切られて容易に隣室から覗けない」ことを前提にして、それぞれの下宿人は自分のプライバシーを厳密に守ることができると考えられよう。つまり、「遊民」と他者の間にはまさにこの壁に仕切られたことによって、互いに接触していないはずである。言い換えれば、東栄館を一つの社会にすれば、郷田三郎が代助と同じ、自分のまなざしで当時の社会を観察したり、他者との距離を置いたりするのであろう。したがって、東栄館は郷田三郎にとっては不可欠な存在であり、観察者としての「遊民」の姿が浮き彫りになる舞台だといえよう。

4.2 代助・郷田の「遊民」像

代助の場合：

「三十になつて遊民として、のらくらしてゐるのは、如何にも不體裁だ」という父親の批判に対して、代助は「上等人種と自分を考へてゐ」て、「食ふ為めの職業は、誠実にや出来悪い」と言い放ち、「高尚な生活欲の満足」を追求している。もちろん平岡の住んでい

¹³ 同注 7、p.57

る世界と対立して、「麵麴を離れ水を離れた贅澤な経験をしなくつちや人間の甲斐はない」という信念を持ち、「贅澤な世界」に住んでいる「美的快樂主義」者といえよう。

ここで、たしかに代助は米田氏の指摘の通り、「美的享受」を楽しんでいることを根本として生きているが、社会が「健全なら、僕は依然として有為多望」であるという点においては、啄木の描いた「遊民」―「彼等の事業は、実に、父兄の財産を食ひ減す事と無駄話をする事だけ」―の姿と代助とはただ受けた教育の差のほかに、なんら変わるところはないと思われる。

にもかかわらず、経済的な余裕が支えた「美的享受」を持っている代助は、数多くの趣味はもちろん、価値観もかなり変わっているとみられる。たとえば、演劇鑑賞（特に歌舞伎）や、読書、音楽などの趣味を持つことが『それから』に描かれているが、特に恋愛観については、「代助は渝らざる愛を、今の世に口にするものを偽善家の第一位に置いた」のである。

代助は平岡と三年ぶりに再会したが、「平岡はどう／＼自分と離れて仕舞った」と感じた。代助はなぜそう感じたかという点、現代の社会は孤立した人間の集合体に過なかつた。（中略）文明は我等をして孤立せしむるものだと、代助は解釈した」（八）からである。

つまり、「社会は孤立した人間の集合体に過なかつた」と感じたのは「遊民」の代助が実社会を離れて社会から孤立するようになったためであろう。

郷田の場合：

多分それは一種の精神病でもあったのでしょう。郷田三郎は、どんな遊びも、どんな職業も、何をやってみても、いっこうこの世が面白くないのでした。（p.249）

冒頭から語り手が存在した形で物語が展開されていることがわかる。「一種の精神病」、「病的な性格」、「非常に変態的で、犯罪嗜好癖ともいべき病気を持ってい」る持ち主であり、「どんな遊びも、どんな職業も」すぐ退屈するという語りを通して、異常な精神状態で否定的な郷田三郎像を描くことができるのであろう。

彼は偶然カフェで知り合った、同じ「遊民」の明智小五郎が語る犯罪の話に惹かれ、「彼はさまざまな犯罪に関する書物を買って、毎日毎日それに読み耽るのでした」（p.250）が、「さすがに法律上の罪人になることだけは、どう考えてもいやでした。彼はまだ、両親や、兄弟、親戚知己などの悲歎や侮辱を無視してまで、楽しみに耽る勇氣はないのです」（p.251）。この場面で、郷田が家族を無視できないという叙述が見られるが、何故家族間の絆を気にしたのかははっきりしていない。ところが最後に殺人を犯したことから考えると、犯罪の話を楽しんでいた郷田は家族の絆から逃れようとしているという可能性も窺えよう。

また、代助と比べると、数え切れないほど沢山趣味を持っている。たとえば、かるたや球突き、テニス、水泳、山登り、碁、将棋、賭博などである。その趣味からでは、美の享受者である代助と違っているのは明かであろう。

「彼はまた、しばしば変装をして、町から町をさまよい歩きました。（中略）女装をすることが、最も彼の病癖を喜ばせました」。しかしながら、「まねごとほどこまでもまねごとで、危険がないだけに」、こうした遊びにもすぐ飽きてしまうのである。

やがて、郷田は、「東栄館という新築の下宿屋」に移り、偶然押入れの天井に隙間を発見し、そこから屋根裏に入り、「言い知れぬ魅力をおぼえるのです」

郷田は「二十人近い東栄館の二階じゅうの下宿人の秘密を、次から次へと隙見して行く、そのことだけでも、三郎はもう充分愉快なのです。そして、久かたぶりで、生き甲斐を感じさせるのです」（p. 255）

前述のように、東栄館という空間は隠蔽性が高いという点で、そこに住んでいる下宿人たちは自分のプライバシーを守ることができるが、屋根裏を歩く人間が存在することは誰

も思い当たらなかった。郷田は他人の秘密を覗き、その行為がもたらす悦楽を味わいながら、「生き甲斐を感じさえする」のである。その上、郷田を通して、読者も屋根裏から東栄館の下宿人の秘密を覗くことになり、覗きの「共犯」者とされてしまうのである。それについて、武田信明は「遊民から犯罪嗜好者、そして覗く男へと徐々に猟奇性を高めてゆく郷田は、覗きという猟奇的なまなざしを媒介して、普遍的な読者へと回路をつなぐのである」¹⁴と論じている。

武田氏の指摘から二つのことが言える。一つは『屋根裏の散歩者』の世界において、「遊民」が犯罪嗜好者になった以上、他人に迷惑をかける「危険人物」になると言えよう。もう一つは覗きという一方通行の視線を利用して、あくまでも自己満足しながら他者との距離が維持できるのである。

4.3 「遊民」の行方

代助の場合：

代助が遊民の生活に終止符を打ったきっかけは、子を亡くし病気となり夫の愛を失った三千代と再会して、彼女を憐れみ、引き受けるという「行動」によるのである。

しかし一方父親から政略結婚を強いられた代助は、もし「父の怒に觸れて、萬一金銭上の関係が絶えるとすれば、彼は厭でも金剛石を放り出して、馬鈴薯に噛り付かなければならない。さうして其償には自然の愛が残る丈」（十三）だと思って、自分に欠けていたものは三千代の愛と悟ったのである。自己本位のままで、「自然」に従って生きていくしかないのではないだろうか。やがて「僕の存在には貴方が必要だ。何うしても必要だ。」と三千代へ愛の告白をして「世間の掟」を破った。父親に勘当され、兄にも罵倒されて、「僕は一寸職業を探して来る」（十七）と言って表に飛び出した結果、代助が自分で「遊民」の市民権を放棄したのである。

郷田の場合：

郷田は屋根裏を散歩するようになってから、ある日、「東栄館の止宿人の内で、三郎のいちばん虫の好かぬ、遠藤という歯科医学校卒業生で、目下はどっかの歯医者助手を勤めている男の部屋」（p.258）に來た。そこで急に「なんの恨みもない遠藤を殺害するという考え」（p.259）が浮かんだ。「ただ殺人行為そのものの興味にあった」のである。ここで代助の三千代への告白と比べると、「遊民」が「他者を見ること」から「他者への行動」へと移すという点で共通していると言えよう。

『屋根裏の散歩者』の結末では、郷田が遠藤をとうとう毒殺してしまった。もちろん最初は罪が発覚される心配で、「なんだかまだ安心しきれないような気がして、三郎はその日一日、ビクビクものでいましたが」「巧妙にやりさえすれば、どんな犯罪だって、永久に頭われないですんで行くのだ。彼はそんなふうにも考えるのでした」（p.268）と不安の気持ちを抑えてみた。しかし遠藤の死因が自殺と判定された三日後、探偵である明智は再び登場し、遠藤の死因を調べ、一度「屋根裏の散歩者」になって、郷田の部屋の上で、彼の「イライラした様子を、すっかり隙見し」てから郷田を疑い始めた。とうとう、郷田の犯罪のやり方が見破られたのである。つまり、「遊民」の郷田はかつては人の私的な領域を覗くという快楽から、今度はほかの人に見られるという恐怖へと移ったことで、他者との関係は一方通行から相互通行に変わったのである。したがって、他者に見られる以上、都市の観察者としての「遊民」の市民権が次第に消えていくのであろう。

¹⁴ 武田信明『『屋根裏の散歩者』—「遊民」のまなざし』『国文学 解釈と教材の研究』学燈堂、1991 年 3 月、p.57

4.4 両作の「遊民」像の異同と社会背景

以上、『それから』と『屋根裏の散歩者』に登場している「遊民」像や社会背景を比較し、考察した結果、以下の表（一）のような特徴をあげられる。

表（一）「遊民」である代助と郷田の異同 ※筆者作成

特徴 \ 遊民	代助	郷田
(1) 経済的余裕	あり	あり
(2) 職業なき人	○	○
(3) 遊民性	傍観者	都市観察者
(4) 危険性	あり	あり
(5) 批判性	あり	なし
(6) 趣味	美の享受	刺激の追求

両者は (1) と (2)、(3)、(4) の特徴が共通しているのは明かであろう。まず、(1) と (2) の特徴は、「相当の財産を有し、従て生活の為に職業に就く要なき人」という当時の「高等遊民」へのイメージにほぼ附合しているが、代助は資本主義社会に不満を抱いていたが、「自然」に従った結果、「遊民」を放棄して職業を探しに行った。一方、郷田の場合は、満足な職業が探せないため、最初から無為徒食の「遊民」像を見せているのである。

(3) の特徴については、代助は実社会を離れ、社会から孤立している立場であり、一方、「頻繁に宿所を換えて歩く」郷田は、常に社会と距離を保ったり、自己の部屋に閉じたりしようとしている。つまり、前者は都市や他者を眺めている傍観者で、後者は都市観察者である。

(4) については、代助が三千代への「自然」の愛を告白した結果、人妻を奪い、「世間の掟」を破ったことを意味する。さらに、父親や兄の面子を顧みず、「家」の制度の破壊を図るのである。郷田も「さすがに法律上の罪人になる」のを恐れていたが、人間社会に定まった「法律」を守らず、殺人罪を犯して、危険な存在ではあるまいか。また、「彼はまだ、両親や、兄弟、親戚知己などの悲歎や侮辱を無視してまで、楽しみに耽る勇氣はない」という描写から見れば、家族の絆から逃れる可能性が窺えよう。つまり、「遊民」は危険人物の傾向があるだけでなく、「家」に厄介な存在ともいえる。

一方、両者の相違点は (5) と (6) が挙げられる。(5) については、郷田と違って、当時の社会現象を眺めている代助には、文明批判者の姿が見られるものの、無気力な態度からでは、「遊民」の市民権を放棄する以前の社会に対する批判はつぶやきにとどまっているとしか言えない。郷田の場合は下宿人のプライバシーを手に入れようと企て、東栄館とい

う舞台を利用して、都市の観察者の役割を果たしただけで、文明批判の意図が見えなかった。したがって、前者は社会のゆがみを目にしたので、社会への批判がみられる。後者はむしろ自己本位のため、自分の目で社会とつなごうとしていると考えられる。

(6) について、代助は普段本を読んだり、音楽を聞きに行ったりする趣味を持った、「美的享受」の遊民である。それに対して、郷田は、数多くの趣味を持ってもすぐ厭きるタイプの遊民である。前述のように、『屋根裏の散歩者』は大正中頃を背景にしたのである。当時、大衆文化が盛んとなり、ラジオや映画が普及するなど娯楽が一般大衆に広まった。「大正末期の映画館は男女の席がわかれていた」(p. 252) という註からわかるように、時代の差によって、娯楽による刺激が次第に高まっていたと考えられる。こうした時代に生きた郷田は、「どんな遊びも」すぐ退屈する持ち主であったため、より高い刺激を追求したのも当然であろう。

5. 結び

以上のように、文学作品における「遊民」の造形は時代の推移によって異なる様相を表している。本稿で考察した結果、両作品の登場人物はどちらも危険性を持つ「遊民」として造形されていることが窺える。その上、「遊民」は、都市観察者として、実は他者と距離を保って実社会を離れた存在であろう。『それから』の代助は日露戦争後の社会のゆがみから「遊民」となり、当時の社会において、よく批判された存在であった。それに対して、『屋根裏の散歩者』の郷田は大衆文化が氾濫している大正時代を生きている「遊民」で、終始刺激を追求する存在だと言えよう。両者の批判性には差があることは明らかであろう。「自然」を追求して人妻を奪った代助の行為は、「世間の掟」への破壊である一方、刺激を追求し続けている郷田はとうとう殺人に走り、「法律上」の犯罪者になってしまったのである。このように、両者が求めようとした理想の中味が異なっているとはいえ、いずれも自己本位の、家族の絆を逃れる傾向が見られる「遊民」像にほかならなかったのである。

したがって、両作品を通して、同じ「危険人物」である「遊民」は社会への批判者から刺激の追求者になり、家族制度の下で厄介な存在だと思われる。なお、本論文では『それから』と『屋根裏の散歩者』を例として作品における「遊民」が家族の絆から逃れる可能性について論証してきたが、更に多くの作品を検証することを今後の課題にしておく。

テキスト

『漱石全集』 第四巻岩波書店 (1966)

江戸川乱歩全集 1『屋根裏の散歩者』講談社 (1969)

参考文献 (五十音順)

- 石川啄木「時代閉塞の現状」『石川啄木全集 第四巻』筑摩書房、1980 年 3 月
- 彙報欄「教学界」『早稲田文学』第 73 号、1911 年 12 月
- 熊坂敦子「「高等遊民」の意味」『国文学 解釈と鑑賞』至文堂、1968 年 11 月
- 桑木厳翼「京大七博士気焰録 高等遊民」『太陽』、1911 年 8 月
- 瀬沼茂樹『『それから』—『満韓ところどころ』』『近代日本思想家 5 夏目漱石』東京大学出版会、1962 年 3 月
- 武田信明『『屋根裏の散歩者』—「遊民」のまなざし』『国文学 解釈と教材の研究』学燈堂、1991 年 3 月
- 平野嘉彦『『屋根裏の散歩者』から『猫町』へ—『群集と観相学／群集の観相学』の序にかえて—』『ドイツ文学』、日本独文学会、2006 年 10 月
- 町田祐一「第二部「高等遊民」問題の再燃」『近代日本と「高等遊民」—社会問題化する知識青年層』吉川弘文館、2010 年 12 月
- 松山巖「高等遊民の恐怖」『乱歩と東京』筑摩書房、1994 年 7 月
- 三好行雄編『夏目漱石事典』学燈社、1992 年 4 月